

# 9月 園長便り



2014年8月29日発行

セブンスデー・アドベンチスト石川教会付属 石川三育保育園

1943年、フランスの飛行機パイロットであったアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは、砂漠に不時着した一人の飛行機のパイロットが、遠い小さな星から来た王子に出会い友情を結ぶという不思議な物語「星の王子さま」を出版しました。その時、彼はナチスドイツの侵攻によって自国は占領され、妻とアメリカへ亡命中でした。

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは、この物語を通して何を伝えたかったのでしょうか。一見して、この物語は児童に向けられて書かれたと思われてしまいがちですが、よくよく一読してみると、大人に、その大人が作り出している社会に対しての批判と警告、そして、助言を伝えているように思えてならないのです。

この物語は、砂漠から始まっています。砂漠は、人が持っている財産も地位も名誉も役に立たない場所であることを暗に示しているようです。何故なら、命の水でさえ期待することが難しい、何も無いところであるからです。人間は、困難な状況にある時、素直になれ、真実が見えてくるのではないのでしょうか。

人が素直になれないとき、どのような思いや態度を示すのでしょうか。アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは、この答えを王子が訪ねていく六つの星の人々― 王様、うぬぼれ男、呑み助、実業屋、地理学者、点燈夫 ―で表しているようです。彼らは、自己満足の生活に浸っています。周りの人を自分の価値観に引き込もうとするのです。そうすることによって、深い孤独という境遇を作り出していくのです。互いのことを理解し、受け入れることができなくなるのです。

ここまで見てまいりますと、現代の私たちへのメッセージに思えてなりません。特に、中東における、シリアの内戦、イスラエルとパレスチナとの対立、ウクライナにおける内戦は、これらのことを物語っているのではないのでしょうか。対岸の火事ではないのです。私たちの身近では、いじめやDV等、傷害や窃盗、殺人は日常茶飯事で起きています。

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは、どのようにこの問題を解決しようと提案しているのでしょうか。それは、キツネが王子に、「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」と告げた言葉に隠されていたのです。この言葉を素直に受け入れた時、王子は本当の真実が見えてきたのです。王子は、「ぼくはあの花を愛していたんだ。ただあの頃のぼくには、花を愛するということが、どういうことなのかわからなかったんだ。」と自覚しました。

実は、王子が小さな星を飛び出して冒険を始めた理由は、あまりにも怒りぽいバラに嫌気をさしたからでした。目に見えないけど、大切なもの、それは、愛であることを教えてくれていたのです。

聖書も「これら小さいのものの上に、愛を加えなさい。愛は、すべてを完全に結ぶ帯である。」

(コロサイ 3:14) と真の友情の秘訣を教えてください。聖書が告げる愛は、自己犠牲的であり、無私の奉仕であります。私たちの社会がこのような愛で絆が結ばれるよう祈ります。

園長 糸数正義

